

## 「JENESYS2.0」2016年度中国社会科学院青年研究者代表团第2陣

### 参加者の感想（抜粋）

○1.日本の少子高齢化問題のレベルは、考えていたより深刻だと知った。少子高齢化は、すでに日本政府における内外政策決定の重大なファクターとなっており、日本が将来的に持続可能な発展を維持できるかどうかの重要なファクターにもなっている。

2. 高齢化の問題に対しては、日本では政府と企業と社会が連携する方式を採用し、一定の成果もあげている。中国とは国情が異なるため、中日両国の相違点を比較しながら、部分的に、焦点を絞って日本の経験を参考にするべきである。徳島県神山町で実施している高齢化と過疎化問題に対する対策は、顕著な効果を上げており、強く印象に残った。しかし中国の農村の高齢化、若者の村離れの問題は日本よりもかなり複雑な問題であり、“神山町モデル”では恐らく解決は難しい。

3. 日本も中国も相次いで高齢化社会に突入するため、介護産業は将来的に日本、中国、アジア諸国が協力して発展させていく新たな注目分野となるだろう。

4. 日本などの国々と、少子高齢化現象の学際的研究を強化すべきである。日本は現在、重点を高齢化問題に据えて対策を実施している。これは短・中期的には疑いなく必要なことではあるが、中・長期的な観点からは、少子化問題の効果的解決も重要である。少子化や高齢化といった要因は人口構造問題を招き、国の社会、経済、政治思想、外交態度などすべての面に影響を及ぼす。アジア地域から見た場合、人口問題は、関係国家間の共通課題として共同の利益の増加を意味するものであり、介護関連産業の協力は、地域協力の新たな注目産業となる可能性もある。

○7日間の東京、徳島の旅は、まだまだ見足りず、感慨はひとしおで、深く感動した。今回の旅の収穫を、大きく3点にまとめて感想を述べたい。

1. 持続可能な発展は、言葉だけでなく、行動しなければいけない。ここでいう持続可能とは、人口問題だけでなく、人間が依存している自然環境や資源までも包括している。今回の訪日では、大塚製薬(株)徳島板野工場や特定非営利活動法人グリーンバレー、神山町を視察したが、どこでも自然と調和し共生しようとする努力と、その確固たる信念の強さに、幾度となく感動した。中国は今まさに、未曾有の自然環境の悪化に直面している。もし今、何もしないでいたら、将来とてつもない金額のコストをかけて、自然へのツケを払わねばならなくなるだろう。

2. 高齢化の勢いを逆転することはほとんど不可能で、高齢者により寄り添った社会環境を作り上げる必要がある。大和ハウス工業(株)や特別養護老人ホーム「健祥会モルダウ」、ケアハウス「健祥会リバティ」の視察において、日本の民間企業が高齢化社会で果たしている責任と役割を深く実感した。多くの場合、政府は指導的役割を果たすのみであり、高齢化問題の真の解決には、社会の各方面の共同努力が必要である。高齢者の尊厳を保ち、出来るだけ健康寿命を延ばし、調和のある社会を作り上げていくことだ。

3. 日本の文化は古代中国の文化に源を有するが、長い歴史の変遷において、独特の伝統文化を作り上げてきた。今回、阿波十郎兵衛屋敷や徳島城博物館では、日本独自の特色や革新的な展示を見学した。今後機会があれば、日本文化の神髄の部分にも是非触れてみたい。

○今回私は、日本というこの魅力的な国に、実際に来て、体験できる機会を得た。日本は国民も国家も、その考え方も行動パターンも、すべてが私にとっても深い印象を与えてくれた。日本の社会全体が有している礼儀、物事に取り組む際の精緻徹底さには、心から敬意を表したい。国家が、教育、先端技術、製造業を重視している点は、中国も学ぶべきである。特に日本人の優れた教養、まじめさ、何事も念入りに行い、規律を重んじ、仕事に対して責任を全うすること、そして、発展に対して開拓精神を持ち、将来性と使命感を持っているこの国の姿は、本当に尊敬の念を禁じ得ない。

帰国後は、周囲の人々にこの真実の情報を自然と伝えることになるだろう。日本民族はたゆまず

努力し、向上心を失わず、まじめで実直な人々であり、優れた教養と積極的な開拓精神を持っている。日本は近代的な先進国であり、教育も先端技術も環境保護も経済分野も、国民の素養の育成の面でも、すべてが世界の最前列にあり、中国が学ぶべき国である。

政治上の争い事は捨て、世界の平和と発展に共同で尽くすことが、中日両国の今後の交流の在り方であるべきだ。日本民族は尊敬すべき民族であり、日本は尊敬すべき国である。先進国として、その力を発揮している。日本をあまり理解していない中国人にも、より多く日本を訪れ、交流し、本当の日本を知ってもらいたいと思う。

“少子高齢化社会への対応”というテーマは、中日両国にとって非常に現実的な意義のある命題である。日本はこの分野の先駆者であり、中国が学ぶべき多くの貴重な経験を有している。この問題に対する日本の計画と対策には将来性があり、詳細にわたっており、現実的である。さらに、産業発展の方向性とも緊密に連携している。日本はアジア全体の高齢者産業を模索し先導していくことを望んでおり、この分野ですでに現実的な対策も行い、“アジア介護人材循環流動計画”などの、良好な成果もあげている。日本は現実的でありながらも、同時に強いヒューマンケアの意識があり、高齢者の感情に寄り添う精神も印象深い。アザラシのおもちや(※補足:メンタルコミットロボット「パロ」)の開発は、介護職員が高齢者の心理や生活習慣に寄り添って生まれたサービスである。

中国はこの分野では後発である。しかし、日本と同様の高齢化の圧力は、もう目の前に来ている。中国は日本の進んだ経験を積極的に取り入れ、自国の高齢者産業の将来図を設計すべきである。日本の高齢者産業が先端技術とヒューマンケアを重視していることを学び、さらに謹厳に実直に高齢者産業を指導し、併せて、日本と同様に開拓精神と使命感を持って、世界規模で高齢者社会に力を尽くして貢献すべきである。

○一言で言うなら“職人魂”である。緻密な生活、物品に対する高度な信頼、世代を超えた伝承、これらが体現されている。日本での生活には、どこでも専門性と仕事への真摯な取り組みが感じられる。

8日間の滞在中、日本の職業女性の魅力を感じた。我々の行程の同行や対応をしてくれたのは一般的に女性が中心で、国立社会保障・人口問題研究所の林先生もみずほ総合研究所の大島先生も、女性研究者としての専門性や職業意識の高さがにじみ出ており、現代女性の新鮮な風格を感じさせてくれた。

日本の家屋の部屋はとても小さい。しかし、温かい便座など生活の隅々まで、どこでも細心に考えられている。言い換えれば、日本は資源を極限まで利用する国なのである。資源の節約、徹底した利用、効果的な活用をし、環境保護と発展とを融合させている。

日中友好会館の綿密な準備と手配に感謝している。日本の文化、生活、日本社会の発展の現状について、深く理解することができた。驚き、かつ喜ばしいことは、現代の若者に“逆都市化”傾向が生じていることである。彼らの考える“人生の幸福とは何か”という新たな概念は、高齢者の価値観にも影響を与えている。高齢者もまた仕事をしており、レストランで高齢者が接客しているのを見た時は、思わず尊厳と感動が沸き上がった。感謝の極みである。

記憶の中にある日本は、日本軍のイメージと民族気質である。しかし、今回の8日間の訪問を通じて、日本の普通の人々の日常生活と人格に直接触れ、庶民や知識人や公務員の真の姿と真摯な友情を感じる事ができた。

高齢化問題は現代の世界的テーマであり、日本はこの分野では多くの模索を重ねている。特に戦略的な施策を取り、政策面でも積極的に対応の準備を進めている。

中国もまさに同じ高齢化への道を進んでおり、問題は極めて複雑である。日本は科学技術、財政、人材といった複数の面から思考し、その成果は中国の社会発展に貴重な経験を提供してくれる。AI技術の発展は、高齢化と人材不足の問題解決の重要な方法論となる。女性の職業参加は、女性の経済的地位と社会的地位を大きく向上させる一方で、これまでの家庭と社会との構造に対して影響が及ぶ、という点にも、注目すべきである。

○最も印象深かった訪問先は、大和ハウス工業(株)と、特別養護老人ホーム「健祥会モルダウ」、ケアハウス「健祥会リバティ」である。大和ハウス工業(株)が販売している高齢者介護用のサポート用品は、まさに高齢者の立場から考えられ、高齢者に徹底的に寄り添ってケアをしようという思想が感じられた。次いで印象深かったのは健祥会である。101歳のおばあさんと子供たちが一緒に遊び、彼女たちが心から笑うその笑顔を見た時、私もまた幸せな気持ちになった。中国で言うところの“一家団欒の喜び”である。かつて中国で暮らしていたというおばあさんの部屋にもお邪魔したが、高齢者施設ゆえの乱雑さは全くなく、とても温かみがあり、家族の写真や使い慣れた生活用品が置かれ、まるで自分の部屋にいるような安堵感と温かさがあった。こうした感覚は、健祥会のグループ理念の体現であり、中国が学び手本とすべき点だと感じた。

数日間の研修を通じて、日本の少子高齢化が直面している厳しい現実をより深く理解した。日本政府はこの問題に多くの改善政策を提出しており、中国も将来的に必ず参考になると感じた。介護の面では、高齢者施設の見学から多くの啓発を得た。中国も現在は第二子までの出産が認められているが、いわゆる中産階級の多くが“生まない”選択をしている。これは、少子化に対する政策や行政サービス、対策など、多くの面が完備されていないためである。帰国後、十分に考えるべき問題である。

○今回の訪日では、非常に美しい思い出が残った。日本文化を愛する気持ちが、さらに一段高まったといえる。中でも最も印象深かったのは、徳島県神山町の特定非営利活動法人グリーンバレーの訪問である。

神山町は風光明媚なところであるが、深刻な少子高齢化にも直面している。現在の人口は6,000人にも満たず、若者の人口は非常に少ない。こうした厳しい状況にあって、当地出身の大南信也氏は1990年代から活動を開始し、日本の農村地域振興の新たな思考と方法論を模索し、神山町で徐々に実施してきた。光ファイバー網に裏打ちされ、芸術や商業といった様々な手段を利用し、地域外の若者の移住と定住を呼び込み、神山町に持続可能な新鮮な血液を注入している。

神山町のグリーンバレーの訪問で、私は自身の故郷である安徽省皖南地区の涇県を思い起こした。私の故郷では、村人はみな生計の維持に必死で、先祖からの土地を離れ、両親や子供を故郷に残したままで北京や上海などの都会に出稼ぎに出る。涇県は山紫水明の土地で、風光明媚な神山町にも決して劣らないが、若者層の人口流出により、村は日々衰退し、基本的に同様の問題を抱えている。私は帰国後、神山町で見聞した内容を、ありのまま故郷の有識者に伝えようと思う。そして彼らとともに、グリーンバレーの成功実績の中から、故郷の振興につながる方法を探し出したい。私は一時、“今後たくさんの学習と研鑽を積んで、いつでも故郷の再建事業にこの身を投じられるように準備をしておこう”、と考える衝動にさえ駆られた。

プログラムに参加する前は、日本や日本人に対する印象は主にメディアから得たもので、表面的で偏見も多いものだった。日本の社会がこれほどまで発達しており、インフラが整っているとは、たとえ中国のここ40年近い高度成長を以てしても、はるかに日本に及ばない。東京の発展と便利さは想像をはるかに超えており、日本人の礼儀と資質の高さは、自分の態度が恥ずかしく感じられるほどだ。

私の専門は今回のテーマである“日本の少子高齢化”とはやや異なっているものの、今回の研修の収穫は極めて大きかった。日本の少子高齢化問題の要因、現象、対策などについて理解が深まり、中国の今後の少子高齢化社会の到来に対しても、予見が可能となった。

私は、今回のテーマはつまり人口問題であると認識している。しかし、1本の樹木では林にはならない。人口問題は社会全体、政治、経済、文化伝統、習慣などの一連の問題が反映されるものである。各要素が集中して、その個々の状況を呈じる時、少子高齢化現象がそこに出現する。そして、少子高齢化現象がこれらの要素をさらに激化していくのである。従って、日中両国は各自の国情に照らして、少子高齢化問題を緩和し解決するための手段と対策を、ともに模索して行かねばならない。